

NHKラジオ番組「子供の時間」に見る戦前の音楽教育の一考察

—番組月刊誌『コドモのテキスト』における「特選童謡」を中心に—

Notes on the musical education before the world war II
in the radio program of NHK "The Children's Hour"

大地 宏子*

Hiroko OCHI

要 旨

大正14年に社団法人東京放送局が開始したラジオ放送は、「子供の時間」という子どものための番組を設け、数々の童謡や唱歌を流していた。当番組が毎月発行していた専用テキスト『コドモのテキスト』では、聴取者の子供たちから募集した童謡（児童詩）のうち、最優秀作に山田耕筰ら第一級の作曲家たちが曲を付け、それらを「特選童謡」としてテキストの巻頭に掲載した（後にラジオでも放送されるようになる）。本論では、戦前のラジオ放送における音楽番組の変遷を辿り、日本放送協会が果たした戦前の音楽教育の一側面を明らかにするとともに、昭和3年～17年までに発行された月刊誌『コドモのテキスト』で発表された130余曲の「特選童謡」における楽曲の特徴を調査した。さらに、同時代に講談社より発行された子ども雑誌『キング』にも目を向け、『コドモのテキスト』の位置づけ、および当時の時代背景における子ども雑誌の役割についても考察した。

はじめに

日本で初めて童謡がラジオ放送の電波に乗ったのは、1925(大正14)年3月26日、東京放送局の開局から四日目のことであった。その後、本放送初日(同年7月12日)に「子供の時間」という子どもを対象とする番組が登場し、以来同番組では数多くの童謡や唱歌が紹介され、当時の楽壇の第一線で活躍していた日本の音楽家たちが、ラジオの前にいる子どもたちに童謡の歌唱指導も行うようになる。やがて、『コドモのテキスト』という番組専用の月刊誌が発行されるようになると、そこで募った児童詩の中の優秀作品に山田耕筰をはじめ著名な童謡作曲家たちが曲を付け、それをテキストに掲載し、ラジオで放送するという形がとられるようになった。このテキストで紹介された児童詩による童謡曲は有に150曲を超えと思われるが、全国の子どもたちのためにラジオが行った音楽教育についてはこれまであまり語られることがなかったため、これらの童謡も今では幻になってしまったのである。

本研究は、戦前のNHKラジオ番組「子供の時間」で放送された、いわゆる「特選童謡」(読者から詩を募り、それに当時の第一級の童謡作曲家たちが曲を付けたもの:後述)に焦点を当て、テレビ等の映像に頼ることができなかった時代の公共放送(ラジオ放送)が、子どもたちに向けてど

のような番組を作成し、どのような音楽教育を行ってきたのか、その変遷を辿ろうとするものである。従来の音楽教育史研究においては、ラジオ/テレビ放送が果たした役割は、ほとんど扱われることがなかった。しかしながら既に戦前において、ラジオ放送は人々の暮らしの中に広く浸透しており、戦前音楽教育史という点でもその啓蒙的教育的役割を看過することは出来ない。ラジオを通した童謡の普及についての基礎データを整理すると同時に、そこから見えてくる戦前NHKラジオ放送の果たした国民啓蒙という、より大きな社会的な役割についても光を当てることが、本研究の目的である。

第1章:「子供の時間」の位置づけ

1-1 放送黎明期における番組編成

1925(大正14)年3月22日、日本で初めてラジオ放送が開始された仮放送初日の放送内容は、海軍軍楽隊による洋楽演奏に始まり、宮城道雄らによる新日本音楽の演奏、ソプラノ独唱、常磐津、四重唱など、その間に三回のニュースを挟みながら音楽番組が大半を占めていた。また、本放送の第一日(同年7月12日)も同様に、陸軍軍楽隊による吹奏楽をはじめ、近衛秀麿の指揮によるベートーヴェンの交響曲の演奏や外山國彦の独唱など、洋楽演奏を中心にした

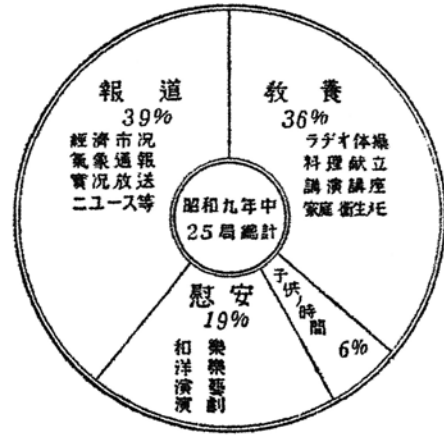
* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

表1① 東京中央放送局における部門別・年度別一日平均放送時間比較表 (『日本放送史 上巻』191頁)

注	雑		演(慰)芸		音(慰)楽		子(教)供の時間		講(教)演・講座		実(報)況		ニ(報)ュース		部門別	年度別
	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送	第一放送	第二放送		
(1)比率は第一、第二放送別に示す。 (2)「雑」には国際交換放送・ラジオ体操・料理献立・家庭衛生メモ・産業メモ・暦・明日の話題・レコード・トーカー・録音等を含む。	七		一、〇二		一、〇九		二五		二、一九		一		一、五二	時 間	大正十五年	年度
	一・六		一五・〇		一六・六		六・〇		三三・五		〇・三		二七・〇	比 率	昭和三	年度
	一五		一、〇六		一、〇七		三二		一、三七		二一		二、〇八	時 間	昭和六	年度
	三・五		一五・五		一五・七		七・五		二二・八		四・九		三〇・一	比 率	昭和八	年度
	一三四		一、〇二		一、〇五		三三		二、四五		一、一九		二、五三	時 間	昭和九	年度
	四・二		一二・六		一三・三		六・七		二二・四		二七・二		三三・二	比 率	昭和十	年度
	一、〇四		五六		一、〇七		三一		二、一〇		一、三三		三、〇七	時 間	昭和十	年度
	一、〇七		一〇・八		一二・七		五・八		二、〇四		一、三三		三、〇七	比 率	昭和十	年度
	一、〇七		一〇・七		一二・七		五・八		二、〇四		一、三三		三、〇七	時 間	昭和十	年度
	一、〇七		一〇・七		一二・七		五・八		二、〇四		一、三三		三、〇七	比 率	昭和十	年度

表1② 項目別放送時間の割合 (『ラヂオ年鑑 昭和10年』巻頭頁)



初「慰安」部門に分類されていたが、1926(大正15)年8月より「教養」部門へ移っている(「教養」はさらに、「講演・講座」と「子供の時間」に区分されていた)。理由は定かではないが、同番組が子どもに対する教育的側面をより重視するようになったことが考えられよう。放送時間は番組開始よりおおむね6%で定着していたようだ。

1-2 「子供の時間」の変遷

「子供の時間」がラジオ番組として初めて登場したのは、東京放送局(芝浦の仮放送所)よりラジオの仮放送が開始されてからおよそ四ヶ月後の1925(大正14)年7月12日、東京本放送(放送局舎は愛宕山に移転)の初日であった。しかしながら、先にも述べたように、童謡はすでに仮放送の四日目より電波を流れていたことが記録されている。NHKのラジオ東京放送局では、仮放送初日から現在に至るまでの番組内容を記録した番組確定表が保存されているため(NHK放送博物館所蔵)、ほぼすべての日付けにおける具体的な放送内容を調べることができる。その資料によると、初めて童謡が放送された1925(大正14)年3月26日には小松耕輔の《雀の機織り》、草川信の《「あんよ」の歌》、弘田龍太郎の《昔ばなし》の3曲が村山久子という歌手によって歌われていた。その後、「子供の時間」というタイトル名は現れないものの、子どもに向けたお伽話や童謡の類の番組は随時放送され、童謡においては先の3月26日以降、本放送日までに5日放送されたことが番組確定表(以後、番組表)には記されている。

そして、「子供の時間」というタイトル名が初めて現れた東京本放送初日には、午後零時からのプログラムの中で、近衛秀麿の指揮によるベートーヴェンの第五交響曲の演奏の後、童謡が朗読された。以後、「子供の時間」は午後2時45分、3時30分、4時、6時40分など放送開始時間が一定しない中、童謡と童話を交互に放送していたが(表2を参照)、本放送開始の翌年1926(大正15)年8月に社団法人日本放送協会の成立を経て、翌9月より「子供の時間」は平日の午後6時からの30分番組として定着するようになった。また、それまで平日のみの放送であったところ、1927(昭和2)年

番組構成になっている¹⁾。
 しかしながら、これらはともに祝賀番組上の構成によるもので、両日を除く通常の放送については表1の①と②で示した通りである(当時の一日の放送時間は仮放送日が5時間、本放送日が6時間半であった)。放送種目と放送時間の割合を示したこれらの表によると、各放送種目は「報道」「教養」「慰安」の三部門に分けられ、放送開始から十年経った1934(昭和9)年の編成(表1②)では、「報道」と「教養」がそれぞれ約4割を、「慰安」が2割を占めていることが分かる。また、表1①が示す各部門の放送時間の推移に注目すると、開局の翌年にあたる1926(大正15)年において低く編成されていた「報道」部門の比重が、1933(昭和8)年に至るまで次第に増える一方で、「慰安」部門のそれは若干減少している。これは、聴取料の増加を図るために当時の一般聴取者の放送観や番組の好みを考慮したことによるものだ²⁾。
 「子供の時間」については、番組の趣旨を「この種目の要素である指導的・啓発的・慰安的な素材が一つに融合され、子どもの生活の全面を包容するところにあり、知・情・意の健やかな発育をねらいとしたもの³⁾」として、放送開始当

表2 NHKラジオ（東京放送局）の番組確定表より「子供の時間」の番組内容一覧：本放送（T.14.7.22）～

大正14年7月	同年8月	同年9月	同年10月	大正15年9月	昭和4年4月	昭和4年5月	昭和6年4月	昭和10年4月	昭和11年1月	昭和12年1月
	童話	童話	なし	童話	童話	童話	童話	童話劇	偉人物語	新年童話ルー(一)
1	童話	童話	童話	童話	四月の歴史	お話し	少年少女の夕	満洲国皇帝陛下御召艦	フルートと管弦楽	前：アノ掛巻他 後：童話ルー(二)
2	童話	童話	童話	童話	なし	童話	お話しと講美歌	前：マンドリン/ハーモニカ 後：かたのおけい	童謡・唱歌 他	前：童話劇 後：童話ルー(三)
3	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話しと講美歌	お話し	童話	童話劇
4	童話	童話	童話	童話	お話し	前：お話し	童謡劇	お話し	吹奏楽	管弦楽
5	童話	童話	童話	童話	お話し	童話	お話し	お話し	お話し	童話劇
6	童話	童話	童話	童話	お話し	童話	お話し	お話し	少年講談	お話し
7	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	前：ラジオ世界見物 後：童謡集	独唱と合唱	幼児童話
8	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	讀仏歌	お話し	郷土童謡
9	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	合唱	ラジオ・アソビ	前：吹奏楽 後：お話し
10	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	物語	お話し	連続童話劇
11	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	管弦楽	連続童話劇
12	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	管弦楽	合唱
13	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	童謡とピアノ	童謡と唱歌	琵琶とハーモニカ
14	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	ラジオ見学 お話しと唱歌	ラジオ・スケッチ	琵琶とハーモニカ
15	童話	童話	童話	童話	お話し	童話	少年運動講座	木琴独奏	ゴドモ日本史	歌物語大楠会
16	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	童話	名作物語	なし	傳記童話劇
17	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	名作物語	和洋音楽	お伽漫談
18	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	名作物語	音楽物語	童謡と唱歌
19	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	ラジオ・アソビ	ラジオ世界見物	近世日本の英傑
20	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	ラジオ・アソビ	なし	近世日本の英傑
21	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	柴笛とアコーディオン	お話し
22	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	童謡と唱歌	合唱	ヴァイオリンと純正調オルガン
23	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	お話し	たのおけい に テキス 童謡
24	童話	童話	童話	童話	お話し	童話	お話し	唱歌劇	連続漫画劇	前：前日と同 後：童話劇
25	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	たのおけい	お話し
26	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	たのおけい	お話しと讃歌
27	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	童話	なし	理科物語
28	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	神話・お話し	お話し	獨唱と斉唱
29	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	洋楽(管弦楽他)	洋楽(管弦楽他)	連続童話劇
30	童話	童話	童話	童話	お話し	お話し	お話し	お話し	お話し	ラジオ・レビュー
31	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	前：状況とお話し 後：名作物語

(作者：大地宏子)

* 日祝日に一日2回放送がある場合は「前」、午後の番組は「後」

** 斜体字：『ゴドモのテキス』に掲載された童謡

3月からは日祝日の午前10時から、さらに同年11月からは午前9時半からと午後6時からの二回の放送が生まれ、実質「子供の時間」は毎日放送されるようになる。こうした背景には、毎夕食前の夕刻には子どもたちがラジオの前に集まる習慣を日常生活に根付かせようとした意図があったのかもしれない。

当初、東京放送に限定されていた「子供の時間」は、1928(昭和3)年には全国放送へと広がり、加えて同年11月からは『コドモのテキスト』という番組専用の月刊雑誌の発行も始まり(次章で詳述)、同番組は放送内容を次第に充実させていった。表2は、東京放送局の本放送第1日から1937(昭和12)年1月31日までの「子供の時間」の番組内容を、前述の番組表より一日ずつ調査し、月ごとに抜粋した一覧を表2にまとめたが、この表からも番組の内容が多様化していく様子を見ることができる。

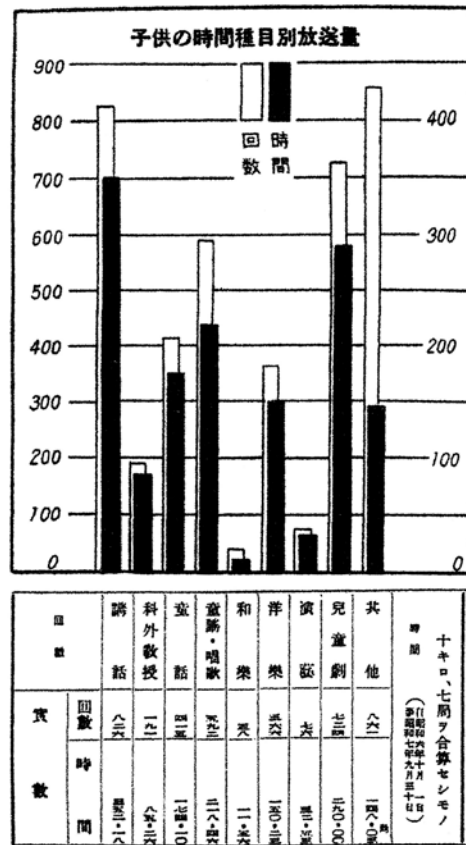
昭和10年代前後より、次第に時局の影響を受けた番組内容が目立つようになり、1941(昭和16)年に「子供の時間」は「小国民の時間」と番組名を変える。それでも1945(昭和20)年8月15日の終戦当日まで放送を続け、終戦日より一週間の休止を挟むも、すぐに放送を再開した。翌年12月より再び「仲よしクラブ」と番組名を改め、その後は1953(昭和28)年のテレビジョンの開局と同時にテレビ番組に移行したが、1958(昭和33)年に33年間の放送を終えた。

1-3 「子供の時間」における番組内容

先に述べた表2において、本放送開始以降の「子供の時間」における番組内容の変遷を示したが、太字で表記した童謡と唱歌の他に、「うたのおけいこ」や合唱や管弦楽の洋楽演奏などの音楽番組も目をひく。童謡や唱歌の歌唱指導を行う「うたのおけいこ」では、放送初期には声楽家の外山國彦や童謡作曲家の佐々木すぐるが歌の講師を務めていたが、昭和9(1934)年10月以降はそれが毎月のプログラムとして定着し、四家文子や黒澤貞子ら当時の著名な女性の声楽家たちが歌唱指導を行っていた(第2章で詳述)。他に、シリーズで放送された「音楽講座」では、軍楽隊の楽長や山田耕筰ら著名な音楽家たちが講師を務め、吹奏楽や管弦楽についての講義を行っていたことも興味深い(後述する番組種目の分類では、「音楽講座」は「音楽」ではなく「講話」に属している)。

ここで、「子供の時間」で放送された音楽以外の番組内容についても目を向けてみよう。年間を通してどのような種目がどれくらい放送されていたかを記録した資料は、東京放送局で1931(昭和6)年より毎年刊行されている『ラジオ年鑑』に残されている。年次毎の事業報告を記した年鑑には、「子供の時間」で放送された各種目の回数と時間を集計した統計が掲載されており、年次によって分類法に多少の違いはあるものの、番組内容はおおよそ「童話」「講話」「児童劇(童話劇・童謡劇・子どものためのラジオドラマなど)」「音楽(洋楽・和楽・童謡・唱歌など)」の四つの種目に分けられていた。1933(昭和8)年次の年鑑に収録されている資料の表3では、とりわけ「講話」の放送回数(および時間)

表3 子供の時間 種目別放送量 (『ラジオ年鑑 昭和8年』279頁)



が群を抜いているが、「童謡や唱歌」も比較的放送回数が多いことから、それが子どもたちにとって人気の高い番組であったと見てよいだろう。

また、『ラジオ年鑑』には、各番組における放送内容の統括と今後の展望を討議した記録が年次毎に詳細に残されており、例えば1934(昭和9)年次の年鑑では、「子供の時間」における童謡と唱歌の放送について、その位置づけを次のように記している。

子供の時間と云へば、大抵この童謡又は唱歌的な印象を受ける程、その実際は一般化されて居る。それが細かく区切られた結果多数として映るのでもあらうが、これは子供一般の生活が何處かにリズムをたたへて居る雰囲気にも照り合つて一層その印象を強めて居るのでもあらう。すなはち、童謡・唱歌は後に輯める演劇と共に子供の時間の双璧をなすものであつて、子供の心を朗らかに歌はせるのは理屈なしに、この時間である⁴⁾。

放送側だけでなく聴取者一般においても、童謡や唱歌が「子供の時間」の一種の代名詞ようになっていて、それらは子供の成長に欠かせないものであるという考えが前提となっていたということが、この引用文から読み取れるだろう。もちろん、映像なき時代のラジオ放送において、耳からの情報が有効に働く番組を制作しようと努めた結果、童謡や唱歌といったメロディーを奏でる音楽プログラムがそれに最も適っていたこともまた事実であったと思われる。

第2章：『コドモのテキスト』と「特選童謡」

2-1 「当選（特選）童謡」の変遷

前章でも触れたように、「子供の時間」は番組専用のテキストを販売するようになった。「子供の時間」の教材書として編集された月刊誌『コドモのテキスト』は、はじめ1927(昭和2)年に大阪放送局から単発の夏季特別講座用として、すなわちBKローカル版として発売された。その後、これに触発される形で、翌年11月には東京放送局からもAKローカル版『コドモのテキスト JOAK』（「御大典記念号」とも呼ばれ、同テキストの創刊号とされている）が、そして1929(昭和4)年4月号からは全国放送版としての『コドモのテキスト』が発行される。その後、テキスト名や体裁をさまざまに変えていきながら（表4の備考欄には、テキストの改題や体裁の変化などを斜体で記している）、1942(昭和17)年頃に終刊を迎えるが、実体としては1941(昭和16)年4月号をもって終わったと見られている⁵⁾。

ところで、テキストには創刊号より「編輯だより」という頁が巻末にあり、ここには各放送局から読者へ向けた番組予告のPRや編集後記、そして「懸賞募集」の案内があった。ここで募集されていたのが「童謡」(＝児童詩)である。応募された童謡の中から入選した作品を「当選童謡」(1931[昭和6]年2月号より「特選童謡」と名称を変えるため、以後、特選童謡と表記)として、雑誌で紹介されるようになったのだ。「懸賞募集」の案内が最初に掲載されたのは創刊号の翌月の1928(昭和3)年12月号で、そこには「童謡」の「題は自由」とし⁶⁾、「童謡の當選作品は、知名の作曲家に作曲をお願いして、誌上に発表の上、放送いたします。尚五等まで賞品を差上げます」(ルビ原著)と記されている⁷⁾。当選した童謡には著名な作曲家が曲を付け、それを番組内で放送するという企画がすでにテキストの第2集より明記されていたことは注目されよう。

「特選童謡」が初めてテキストに掲載されたのはさらに翌月の1929(昭和4)年1月号で、津々井治助という人の詩(童謡)に近衛秀麿が曲を付けた《みかんのぼんぷ》という楽譜の付いた童謡曲が巻頭頁に登場した(巻頭頁に楽譜が載ったのはこの巻号のみ)。以後、一等の当選童謡1篇はイラストとともに毎号テキストの巻頭頁(目次の次頁)を飾り、佳作の当選童謡4篇は巻末の「編輯だより」にまとめて掲載されるようになった。

やがて「特選童謡」に曲が付けられるようになるのは、テキストに別紙の附録が挟まれるようになって少し後の1930(昭和5)年以降で、この附録に楽譜の付いた特選童謡が楽譜となって掲載された。これは巻頭頁で掲載された一等当選者の童謡に、山田耕筰・中山晋平・弘田龍太郎をはじめ、草川信・成田為三・大中寅二・河村光陽といった童謡界における著名な作曲家たちによってメロディーが付けられたものだ。つまり、最初に童謡詩が巻頭頁で発表されてから約二か月から半年後に(その間に作曲が行われていた)、今度は童謡曲として再びテキストにお目見えしたのだ。以後、テキストの体裁は少しずつ変化するが、巻頭を飾る曲の付かない一等の特選童謡1篇／楽譜の付いた特選童謡

1曲／佳作の特選童謡4篇を毎号紹介する形態がしばらく続いた。

2-2 読者が参加する「特選童謡」

1933(昭和8)年4月号はテキストの大改訂とともに、特選童謡に関する特集が新たに加わった。一等当選者の顔写真と訪問記事が、「A君訪問記」や「Bさんを訪ねて」と題して巻末頁で紹介されるようになったのだ。テキストの編集者が全国津々浦々の当選者宅を突然訪ねて行き、そこで初めて当選を知らされる家族と当選者の様子が細やかに記されている。当選者の多くは小学生の子どもだったが、なかには京都に住む女中さんや足利の幼稚園に務める保姆さんや徴兵適齢期を迎えるパン工場の職人さんなど成人した大人も紹介されていることから、幅広い年齢層の人たちが「子供の時間」に耳を傾けていたことがうかがえる。こうした人選には「ありとあらゆる地方／階級の人を網羅する」、すなわち普段日の当たりにくい立場の人を積極的に取り上げ、それによって「国民は一つである」という意識を高めるといことが意図されていたのかもしれない。

ところで、1930(昭和5)年以降、メロディーの付く特選童謡は一等当選者に限られていたため、テキストには一号につき一つの楽曲を掲載してきたが、1934(昭和9)年6月号より二つの特選童謡に楽曲が付き、2曲ずつ紹介されるようになった。すなわち、一等の特選童謡1篇の他に、佳作作品1篇にも楽曲が付けられたのである。やがて、翌1935(昭和10)年頃からはこれらの童謡曲2曲が、四家文子をはじめ黒澤貞子や武岡鶴代ら当時の第一線で活躍する声楽家たちが講師を務める「うたのおけいこ」という歌唱指導のコーナーにおける課題曲となり、「子供の時間」の番組内でも放送されるようになった(表4の「『うたのおけいこ』など音楽に関する記事」の欄を参照)。

入選した特選童謡がテキストで紹介されるだけでなく、著名な作曲家によって作曲された童謡曲として再びテキストに掲載され、さらには「うたのおけいこ」の課題曲としてラジオの電波を通して全国に放送されることが、子どもたちにとっては夢のような体験であったに違いない。資料1の「上田昌子さんを訪ねて」と題した訪問記(1936[昭和11]年1月号)には、特選童謡として選ばれた「昌子さん」の兄(実さん)の歌が、四家文子の歌唱指導による「うたのおけいこ」の課題曲としてラジオから流れてくるのを、一家そろって耳を傾けている様子が描かれているので、以下にその部分を引用してみよう。

時計の針を見つめながら家中の者が子供のテキストをまん中に輪を描いてラヂオの前に坐つてゐます。今日は僕の特選童謡『かげぼうし』のおけいこの日です。四家文子先生の美しいお聲がラヂオから流れ出ました。私はお姉様や妹の昌子と一生懸命になつておけいこしました。お父様とお母様はニコニコして聴いていらつしやいます。四家先生が『これはラヂオ体操のかげぼうしが動いてゐるところを謠つた滑稽なやうな面白いおうたです』とおつしやいましたので僕は嬉し

表4 特選(当選)童謡一覧、および『コドモのテキスト』の変遷

年月 巻(号)	特選童謡 一等数	特選童謡 佳作数	楽譜付特選童謡(拍子/調性/音階) ①ヨナ抜き②ヨナ4③ヨナ7 ④西洋2' 西洋42' 西洋7	訪問記	「うたのおけいこ」など 音楽に関する記事	テキスト名の改題/体裁の変化(斜体) 備考
1(1)1928.11						子供のテキスト関東支部編集部発行、(株)北隆館より販売
1(2) 12						『編輯たより』の頁が現れ、「童謡」の懸賞募集を初めて掲載
2(1)1929.1	1	0				
2(2) 2	1	0				懸賞募集はあるが、「童謡」の募集はない
2(3) 3	1	0				
2(4) 4	0	0				テキスト題目にJOAKの文字が消える
2(5) 5	0	0			ゴドモ音楽講座「軍楽隊で使う楽器の話」陸軍戸山学校音楽隊長 辻順治	
2(6) 6	1	4			ゴドモ音楽講座「音楽の組み立」野村光一	
2(7) 7	1	4				
2(8) 8	1	3				放送局(日本放送協会)からの直売方式へ
2(9) 9	1	?			「唱歌が上手になるには」田村虎藏	『編輯たより』が狭みこみの附録になる
2(10) 10	1	?			ゴドモ音楽講座「ベートーヴェン物語」青柳晋吾	
2(11) 11	1	?			子供音楽講座「行進曲の話」伊庭孝	
2(12) 12	1	?			子供音楽講座「天才モーツァルト」小松耕輔	
3(1)1930.1	1	?			子供音楽講座「世界音楽地理」牛山亮	
3(2) 2	1	4				
3(3) 3	1				子供音楽講座「楽器の王様パイプ・オルガン」津川圭一	
3(4) 4	1	4	わたしのぼうし(ⅡE②)		少年音楽講座「少年時代のヘンデル」山本壽	当選童謡に曲が付き始めている
3(5) 5	1				「キルヘルム・テル」松島舞子	
3(6) 6	1				「童謡を作る方々へ」葛原しげる	
3(7) 7	1					
3(8) 8	1					
3(9) 9	1	4	放送ごっこ(ⅡD①)			
3(10) 10	1	4	鶏の体操(ⅣC①)			
3(11) 11	1					
3(12) 12	1	4	ラヂオは何處でも(ⅡG①)			
4(1)1931.1	1	4	さるのアンテナ(ⅡF①)			
4(2) 2	1	4	テキストの兵隊(ⅡD①)		「歌の歌ひ方」外山國彦	『当選童謡』が「特選童謡」に
4(3) 3	1	4	カラスとラヂオ(ⅡG①)			
4(4) 4	1	4	野球のラヂオ(ⅣEs②)		「うたのおけいこ」佐々木すぐる	
4(5) 5	1	4	呉服屋のラヂオ(ⅡF①)			
4(6) 6	1	4	アンテナ(ⅡG①)			
4(7) 7	1	4	お庭のラヂオ(ⅡC①)			
4(8) 8	1	4	子供の時間も歩いている(ⅣD①)			
4(9) 9	1	4	明日の遠足(ⅡAs①)			
4(10) 10	1	4	つばめとたけのこ(ⅡF①)		「うたの作り方 味わひ方」	
4(11) 11	1	4	ラヂオのお医者(ⅡEs②)			テキストの出版を放送局から放送出版協会へ。一般書店で販売
4(12) 12	1	4	僕等は伸びるよ(ⅡEs①)			
5(1)1932.1	2	2	青い大空(ⅣF②)			別冊綴じ込みの「よみもののページ」開始
5(2) 2	1	4	さようなら(ⅣEs②)			
5(3) 3	1					
5(4) 4	1	4	野球の放送(ⅣG①)			『「特選童謡集」が出来ました」の広告有り
5(5) 5	1	4	おばあさんとラヂオ(ⅢEs①)		音楽物語「モーツァルトの子守歌」鎌入龜輔	
5(6) 6	1	4	通せんぼ(ⅡC①)			
5(7) 7	1	4	うちの父さん(ⅡD①)			
5(8) 8	1	4	なしのおうち(ⅣC①)		「うたのおけいこ」外山國彦	毎土曜の晩に外山國彦による特選童謡のお稽古開始
5(9) 9	1	4	つばめ(ⅡF①)			
5(10) 10	1	4	停電(ⅡC①)			
5(11) 11	1	4	オリムピック(ⅡD①)			
5(12) 12	1	4	しづく(ⅡG①)			
6(1)1933.1	1	4	つなわり(Ⅱc③)			
6(2) 2	1	4	床屋のラヂオ(ⅡD①)		「童謡の作り方 味わひ方」西條八十	
6(3) 3	1	4	雨だれ兵隊(ⅡE①)			
6(4) 4	1	4	まつかなもみぢが(ⅡD②)	○		『RADIO 子供のテキスト』に改題/「よみもののページ」が本誌と合体
6(5) 5	1	4	お星様ひとつ(ⅡD①)	○		
6(6) 6	1	4	赤い夕日(ⅡC①)	○		『ラヂオ 子供のテキスト』に改題
6(7) 7	1	4	のびたからす瓜(ⅡD①)	○		
6(8) 8	1	4	かへつてこい(ⅡC①)	○		
6(9) 9	1	4	海邊の夏のお晝です(ⅣF②)	○		
6(10) 10	1	4	僕等の時間(ⅡD①)	○		
6(11) 11	1	4	お月さま(Ⅳf①)	○		
6(12) 12	1	4	ラヂオ体操(ⅢC①)	○		
7(1)1934.1	1	4	ザアサアみんな六時です(ⅡE①)	○		
7(2) 2	1	4	野球のハウウウ(ⅡF①)	○		
7(3) 3	1	4	奴唄(ⅡC①)	○		
7(4) 4	1	4	お早よう(ⅡC①)	○		
7(5) 5	1	4	萬ざい・萬ざい・皇子さま(ⅡC①)	○		
7(6) 6	1	4	ウタツカカホ(ⅡG①)/お早うさん(ⅡG②)	○		佳作の特選童謡にも曲が付けられる
7(7) 7	1	4	落書(ⅡA①)/一ネンセイ(ⅡF①)	○		
7(8) 8	1	4	夏の朝(ⅣC①)/お月様(ⅡD①)	○		
7(9) 9	1	4	とーんぼとんぼ(ⅡG①)/僕は燕(ⅣD①)	○	「お歌を上手にうたふ法」ダン道子	
7(10) 10	1	4	かくれんぼ(ⅡD①)/防空演習(ⅡD①)	—	「うたのおけいこ」ダン道子	
7(11) 11	1	4	くも(ⅡD①)/金魚のなほとび(ⅡC①)	○	〃	
7(12) 12	1	4	お窓の栗(ⅢG②)/となりのをばさん(ⅡG①)	○	〃	
8(1)1935.1	1	4	雀のお宿(ⅡG①)/マイクロフォンのお月様(ⅡF①)	○	「うたのおけいこ」武岡鶴代	
8(2) 2	1	4	スズメサン(ⅡC①)/ラヂオだラヂオ!(ⅣG①)	—	〃	※当選者が動め先を辞めていたため訪問できなかった、とある
8(3) 3	1	4	僕の兄さんスキーヤー(ⅡE①)/あかね雲(ⅢC①)	○	〃	
8(4) 4	1	4	僕の希望は音楽家(ⅡD①)/アンテナの囀(ⅡC②)	○	〃	
8(5) 5	1	4	かひぼうし(ⅣF①)/イチネンセイ(ⅡD②)	○	「うたのおけいこ」四家文子	
8(6) 6	1	4	オチヤウン / ラヂオ(ⅡC①)/僕等の節句(ⅡC①)	○	〃	
8(7) 7	1	4	雀のかくれんぼ(ⅡD①)/ツツツつばめ(ⅡF①)	○	〃	
8(8) 8	1	4	タやけ(Ⅱg①)/陸海学校(ⅡC①)	○	〃	

8(9)	9	1	4	おまはりさん(ⅡC①)/トホッパヨ(ⅡD①)	○	「うたのおけいこ」柴田秀子	
8(10)	10	1	4	あさのラヂオ(ⅡD①)/兵隊さん(ⅡG①)	○	〃	「課題」をやめて、「今日の「子供の時間」で一番よかった放送」を募集
8(11)	11	1	4	佛法僧(ⅡC①)/アンテナの背くらべ(ⅡG①)	○	〃	
8(12)	12	1	4	鳩時計(ⅡD①)/秋(ⅡC①)	○	〃	
9(1)	1936.1	1	4	はやおきすずめ(ⅡF①)/雨あがり(ⅡF①)	○	「うたのおけいこ」黒澤貞子/少年音楽講座(一)音楽とは、伊庭孝	
9(2)	2	1	4	おちい様の肖像画(ⅡD①)/八百屋のおちさん(Ⅱe①)	○	〃/少年音楽講座(二)独唱と合唱/外山國彦	
9(3)	3	1	4	うちのねえや(Ⅱe①)/アンテナさん(ⅡF②)	○	〃/少年音楽講座(三)吹奏楽/内藤清二	
9(4)	4	1	4	お日様の繪かき(ⅡD①)/だんまりだるま(ⅡD①)	○	〃/少年音楽講座(四)管絃楽/山田耕作	特選童謡の題目が目次にまとめて表記される
9(5)	5	1	4	米とぎ(Ⅱ③)/でむし(ⅡE①)	○	「うたのおけいこ」ダン達子/少年音楽講座(五)行進曲/堀内敬三	
9(6)	6	1	4	青い空(ⅡE①)/くびり人形(ⅡG①)	○	〃/少年音楽講座(六)雑曲/井上武士	
9(7)	7	1	4	向ふのお家(Ⅱd①)/朝です(ⅡC①)	○	〃/少年音楽講座(七)ババポルガソ/木岡英三郎	
9(8)	8	1	4	キャンプの朝(ⅡB①)/蜘蛛さん(ⅡC①)	○	「うたのおけいこ」ダン達子/少年音楽講座(八)ピアノ/吉原規 毎月「解説付管絃楽」が始まる(1938.12まで)続く	子どものテキスト「支部の会」を募集
9(9)	9	1	4	汽車ごっこ(ⅡF①)/僕の子さん(ⅡD①)	○	「うたのおけいこ」平井美奈子/少年音楽講座(九)打楽器/私田龍太郎	子どものテキスト「支部の会」を作りましたの案内頁
9(10)	10	1	4	お徳ひがへり(ⅡF①)/ラヂオごっこ(ⅡE②)	○	〃/少年音楽講座(十)ハーモニカ/川口章吉	童謡の課題が「題材自由」に
9(11)	11	1	4	影ふみ(Ⅱ③)/雨だれ電車(ⅡG①)	○	〃/少年音楽講座(十一)樂器/鹽入龜輔	第5回唱歌コンクール
9(12)	12	1	4	ままとこと(ⅡC①)/編物(ⅡE②)	○	〃/少年音楽講座(十二)聲の種類/泉田知幸	
10(1)	1937.1	1	4	みのむし(ⅡC①)/兵隊さん(ⅡB①)	○	「うたのおけいこ」四家文子	特選童謡一等の作品が万年筆から写真機に/第一回子供のテキスト支部代表者の会
10(2)	2	1	4	北風(ⅡC①)/田圃道(ⅡC①)	○	〃	
10(3)	3	1	4	兄さんのお靴(ⅡF①)/お留守番(ⅡF①)	○	〃	
10(4)	4	1	4	春のお手紙(ⅡD①)/山鳩小鳩(ⅡC①)	○	「うたのおけいこ」柴田秀子	
10(5)	5	1	4	この道ほそ道(ⅡE①)/麥笛吹いて(ⅢE①)	—	〃	
10(6)	6	1	4	ひよこ(Ⅱg①)/花屋のお客(ⅡC①)	—	〃	特選童謡の選出者 漢田廣介先生
10(7)	7	1	4	夕飯どき(ⅡEs①)/櫻もち(ⅡD①)	○	〃	
10(8)	8	1	4	蛙の子ども(ⅡF①)/金魚の電話(ⅢC①)	○	「うたのおけいこ」黒澤貞子	
10(9)	9			おしゃれのとんぼ(ⅡC①)/かへるとおへそ(ⅡD①)	○	〃	
10(10)	10	1	4	子牛(ⅡEs①)/坊やお写真(ⅡF①)	○	〃	
10(11)	11	1	4	僕の兄さん(ⅡC①)/やさしい小父さん(ⅡC①)	○	〃	
10(12)	12	1	4	宿題(ⅡC①)/子供兵隊さん(ⅡF①)	?	〃	

(作者:大地宏子)

くてたまりませんでした⁸⁾。

これは、「子供の時間」がその当時の人々にどのように受容されていたかを知るうえでも興味深い資料であろう。

楽曲付きの特選童謡が2曲ずつ掲載された1934(昭和9)年半ばから1937(昭和12)年末までの三年半、特選童謡は最盛期を迎えていた。だが、それまで巻頭を飾っていた一等の特選童謡は次第に後ろの頁に移されていき、1938(昭和13)年1月号になると、ついに一等の特選童謡は姿を消し、巻末に近い頁に5編の特選童謡がまとめて掲載されるようになった。同時に、子どもたちの作った特選童謡に曲が付くこともなくなり、一等の特選童謡の消滅と共に、一等当選者の訪問記の掲載も終わった。

子どもたちによる童謡曲の代わりにテキストに掲載されたのは、《日の丸万歳》《戦地のお父様へ》《こども勤勞奉仕の歌》等の愛国歌で、これらを作詞したのは北原白秋・西條八十・サトウハチローら当時のトップクラスの詩人であった。また、番組内の「うたのおけいこ」のコーナーにおいても、これまでの特選童謡に代わって愛国歌が課題曲として数多く紹介されるようになった。こうしてNHKのラジオ放送は、「子供の時間」においても戦時体制への番組へ切り替えていき、ラジオを通して全国の子どもたちを国威発揚へと啓蒙していったのだった。

2-3 「特選童謡」の楽曲の特徴

子どもたちの作った童謡詩に作曲家たちがメロディーを付け、特選童謡としてテキストに掲載された曲数は、およそ8年間で130余曲あったと思われる。そのうち、筆者がこれまでに入手できた130曲について、楽曲の特徴を考察してみた。

まず、拍子に注目して整理してみると、使われているのは2拍子、3拍子、4拍子の3種類で、それぞれの割合は順に105曲、17曲、8曲であった。圧倒的に2拍子の楽曲が多く、

資料1 『ラヂオ 子供のテキスト』1月号(1936年)、79頁

上田昌子さんを訪ねて K・K 生

「かばうし」といふ童謡が特選に入つた見
さんのお父さん、一緒に出て来られた。
黒澤貞子、昌子さんのおちい様は、特選で
長い間、小學校の先生をしていらつた
ので、此度卒業生が記念碑を贈呈して
下さつたので、お家中の方々が、お膝に
ついてをられた。昌子さんが、昌子さんの
童謡の特選に入つたことを告げると、昌子
が大笑ひに喜んで下さり、いつぞや
「かばうし」といふ童謡が特選に入つた見
さんのお父さん、一緒に出て来られた。
黒澤貞子、昌子さんのおちい様は、特選で
長い間、小學校の先生をしていらつた
ので、此度卒業生が記念碑を贈呈して
下さつたので、お家中の方々が、お膝に
ついてをられた。昌子さんが、昌子さんの
童謡の特選に入つたことを告げると、昌子
が大笑ひに喜んで下さり、いつぞや

特選に入つて

上田 昌子

4拍子のそれと合わせると楽曲全体の94%が2拍子系であることが分かる。

次に、リズムに着目してみると、その多くが ♪♪♪♪ や ♪♪♪♪ などの2拍子による音型の組み合わせから出来ており、符点のリズムが多用されているのも特徴的である。現在、幼児を対象とした歌には裏拍から始まるフレーズやシンコペーションによるリズムが少なくないが、特選童謡にはそのような多様なリズムはあまり見られない。

譜例1 『ラヂオ 子供のテキスト』1月号(1937年)、84-85頁

みのむし (子供のテキスト)

ゆるく、流れて (M.M. ♩=76)

古村智恵子作詞
山田耕筈作曲

— (85) —

「子供のテキスト」
特選童謡

みのむし

〔古村智恵子作詞
山田耕筈作曲〕

一 露虫の、みのむし、露のなかからよふのは、さびしいな、木の枝に、深霧のさやき、風のうた、とうろり、きいて、ぬむります。

二 露虫の、みのむし、露のなかからよふのは、さびしいな、木の枝に、深霧のさやき、風のうた、とうろり、きいて、ぬむります。

二月二十二日(二十三日)A.E.放送
四、家文子

— (84) —

また、楽曲の調性においては130曲のうち短調が6曲、陽旋法が3曲、残りの121曲はすべて長調であった。長調の中で最も多いのがハ長調で37曲、二番目に多いのがニ長調で28曲、次いでヘ長調が20曲、ト長調が14曲と続き、これら4つの調性が全体の半分を占めているが、他にホ長調や変ホ長調もいくつか見られる。

さらに、各曲の音階を分析してみると、唱歌調の典型ともいえる(五音から成る)「ヨナ抜き音階」と、七音から成る「西洋音階」に大別される。ただし、ヨナ抜き音階であっても第四音や第七音が出てくるものや(譜例1)、逆に西洋音階であっても第七音(稀に第四音)が欠けているものなど、楽曲すべてを機械的に分類することは困難を極めたが、楽曲全体における第四音と第七音の機能和声的/導音的役割に視点を置き、その境界を見極めた。その結果、130曲のうちヨナ抜き音階は112曲(うち準ヨナ抜き音階は15曲)で、西洋音階は15曲(うち西洋音階に準ずるものは9曲)であり、ヨナ抜き音階が特選童謡全体の86%を占めていた。

以上の結果をまとめたものが、表4の「楽譜付特選童謡」の欄である。ここには特選童謡の曲名とともに、括弧内には楽曲の拍子(ローマ数字)・調性(アルファベット)・音階の種類を順に示している。音階の種類については、ヨナ抜き音階を①、ヨナ抜き音階+第四音を①'、ヨナ抜き音階+第七音を①"、西洋音階を②、西洋音階で第四音の欠如を②1'、西洋音階で第七音の欠如を②"で表している。

ちなみに音階と調性の関係にも目を向けてみると、西洋音階においては、変ホ長調やト長調やヘ長調などハ長調以外の多様な調性が多く使われ、特選童謡全体で最も多かったハ長調による楽曲がわずかに曲しか見られなかった。す

なわち、ハ長調によるヨナ抜き音階が、当時の子どもたちにとって最も親しみやすい楽曲であったと推察することも出来よう。

第3章：大衆雑誌『キング』と『コドモのテキスト』

3-1 『キング』のラジオ的機能

「子供の時間」が人気番組として長く放送され続けてきた背景には、番組専用の月刊テキスト『コドモのテキスト』の存在が少なからずあったと思われる。このテキストの販売部数についての資料は今のところ見つからないが、購読者を獲得するためにテキストではさまざまな試みが行われていた。その一つが、読者から毎月「特選童謡」を募り、当選者には賞品の進呈と当選作品のテキストへの掲載(一等当選者には作品の楽曲化と番組内での楽曲放送)という懸賞募集であった。

一方、『コドモのテキスト』の刊行が始まったちょうど同じ頃、日本初の百万部を達成した講談社の大衆雑誌『キング』(1925年1月創刊号)も全盛期を迎えていた。「面白くてためになる」国民大衆雑誌をキャッチフレーズに、多岐にわたる幅広い階層の老若男女に読まれた月刊誌『キング』は、教養的なものから娯楽的なものまでありとあらゆる内容豊富な記事と安価でボリュームのある頁数などが支持され、驚異的に発行部数を伸ばしていった。

興味深いことに、この『キング』でも、実は『コドモのテキスト』と同じ懸賞募集が行なわれていたのだ。佐藤卓己によると、ラジオや映画の影響で人気のあった新民謡や小唄などの流行歌に対抗する「健康なる歌」として、『キング』は創刊以来、中山晋平や小松耕輔らの作曲による「キング歌曲」の楽譜を数多く誌上で掲載していた。そしてラ

ジオ放送の開始を背景に、レコード業界は1927年に日本コロムビア、日本ビクター、日本ポリドールの三大レーベルに再編されたのだが、1931年に講談社は日本ポリドールと提携し、『キング』を母体とした「キングレコード」を販売し始めた。レコード産業に乗り出した講談社にはレコード部が設置され、『キング』のほか六誌の1930年新年号では、「健全なる歌」の懸賞募集が行われていたのである。

レコード部の選者には詩人の北原白秋、西条八十、野口雨情、作曲家の山田耕稼、中山晋平、弘田龍太郎の名前が見られるが、彼らが特選童謡を作曲していたことは本論で述べてきたとおりである。しかも、『コドモのテキスト』が特選童謡の懸賞募集を始めたのが1928年12月号であるから、時期的にも完全に重なっている。さらに、「健全なる歌」が「キングレコード」として発売されたことも、特選童謡がラジオの電波に乗っていたことの並行現象として見ることもできよう。佐藤は『キング』を「ラジオ的雑誌」、「キングレコード」を「私設ラジオ番組」と呼び、両者のラジオへの同調機能性を指摘している⁹⁾。

3-2 読者参加型による共同体への連帯感

『キング』と『コドモのテキスト』における注目すべき共通点は、聴取者／読者の「参加の感覚」にもある。佐藤は、こうした共同体への連帯感を煽り立てた仕掛けについて、『キング』の「ラジオ的雑誌」としての側面から次のように説いている。

たとえ一方通行であっても、それまでのエリートの、都市生活者の、男性の特権であった情報への回路が、大衆の、地方生活者の、女性の手へ、すなわち全国民に開放されたのである。しかも、多くの国民にとって、それは「一方通行」とは感じられなかった。そのことは、『キング』の懸賞応募や投稿に寄せられた膨大な数の手紙から裏付けられる。今日のラジオやテレビが電話やファックスによる視聴者の「直接」参加を呼びかけるように、あるいは視聴者参加番組が選択肢から回答させることで「主体的」参加を演出するように、『キング』と読者の親密性は、手紙というメディアによって補強されていた。『キング』には読者の感想文などを紹介する「読者倶楽部」欄や、和歌、俳句、川柳、民謡など「懸賞読者文芸」欄が備付けられていた¹⁰⁾。

実は『コドモのテキスト』においても、懸賞募集には「童謡」の他に「課題」というクイズも毎号出題されていた（後に「綴り方」という作文に変わる）。また、巻末頁には「放送室」と題して、読者からの手紙も掲載していた。ここにはテキストや番組に対する要望も紹介されているが、「愛読者の皆様私はこんどテキストのお友達になりましたからよろしく」「これから『子供のテキスト』の愛読者諸君と共に、誌上にて御通信致したく思つて居りますどうぞ願ひ致します¹¹⁾」といった便りも寄せられていることから、テキストを通じた文通友人を募る頁としても活用されていたと思われる。

さらに、1936(昭和11)年8月号より「子供のテキスト 支部の会」の募集も始めていた。これは各地域で十人以上から成る支部を作るための支部員を募るものであり、支部員

には愛読者大会や放送局の見学の際に便宜を図るという特典が記されているが、本来の目的はテキストの購読者を一人でも多く獲得することにあったのだろう。募集が告知された翌月号の「子供のテキストの支部を作りませう!!!」と題した巻末頁には、「支部の方々にはかういふ美しい子供のテキストのメダルを差上げます」として、メダルの絵が描かれている¹²⁾。支部の結成に対する呼びかけはその後何度かテキストの巻末で紹介され、1937(昭和12)年1月号には支部の代表者たちによって開かれた「支部代表者の会」が報告された。会にはテキストの編集者たちも集まり、代表者からの様々な要望を聞くなどの意見交換が行われていたようだ。まさしくこうした企画は読者たちの「連帯感」と「参加の感覚」を狙ったものであることを象徴しているといえよう。

おわりに

本論では、NHKのラジオ番組「子供の時間」に見る音楽番組を通して、戦前の音楽教育の一端を明らかにした。ラジオ放送の黎明期における「子供の時間」の番組内容を網羅的に調査することにより、子どもに向けた童謡や唱歌など音楽番組がどのように放送され、また受容されたのかを辿ってみた。とりわけ番組の専用テキストである『コドモのテキスト』で懸賞募集された「特選童謡」に焦点を当て、1930(昭和5)年から1937(昭和12年)にかけてテキストに掲載された150余曲のうち、入手し得た123の童謡についてそれらの楽曲の特徴をまとめた。

また、『コドモのテキスト』の刊行と時を同じくして創刊された大衆雑誌『キング』にも注目し、両雑誌が「大衆の国民化」を促す装置として働いた背景についても考察を試みた。すなわち、出版当初は懸賞募集や読者投稿欄に見られる読者参加型の編集法によってテキスト(雑誌)の販売促進を目的としていた両者が、戦時体制下のもと、次第に戦意高揚を前面に押し出し、大衆を国民化する使命を担っていったのだ。

『コドモのテキスト』において、長らく巻頭を飾っていた読者の子どもたちの応募による特選童謡が、1938(昭和13)年から時局の影響によりテキストからその姿を消し、代わりに現れたのが戦意高揚や総動員を謳ったプロの作詞家や作曲家による愛国歌であったことは第2章ですでに述べたが、『キング』においても、戦時体制下では創刊以来の娯楽性が削られる一方で時局の認識に関する記事が増え、総力戦体制への教化性が強化されていったという。しかも、大衆がそうした雑誌をすすんで購入することによって政治参加を体験し、国民的アイデンティティを確認していたのだ、と佐藤は指摘する¹³⁾。つまり、『キング』は「大衆雑誌」から「国民雑誌」へと変容していったのだ。もちろん戦意高揚を目的とする当時の大衆雑誌は『キング』に限ったものではないが、『キング』がいわゆる「声の出版物」として、「キングレコード」を作るに至った点は、やはり注目に値しよう。「子供の時間」における当選(特選)童謡と、「キングレコード」における「健全なる歌」は、

音楽を通じた総動員体制の産物であったと見ることも出来る。このラジオの子供向け番組／レコードを通じた国民の全体主義的な統合については、今後の研究のさらなる課題としたい。

注

- 1) 日本放送協会編『日本放送史 上巻』、日本放送協会、1965年、80-82頁。
- 2) 放送黎明期における聴取者数の推移についての詳細は、拙稿「戦前のNHK ラジオ番組「子供の時間」に見る音楽番組の変遷－放送黎明期から『コドモのテキスト』に至る童謡を中心に－」（佐野靖・杉本和寛編『文化としての日本のうた』、東洋館出版、2011年）を参照されたい。
- 3) 日本放送協会編『日本放送史 上巻』、前掲書、90頁。
- 4) 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和9年版』、日本放送出版協会、1934年、182頁。
- 5) 秋山正美編著『ラジオが語る 子どもたちの昭和史 I』、大空社、1992年、27頁。
- 6) 当初は童謡の題目を「自由」としていたが、1929(昭和4)年4月号から1936(昭和11)年9月号まで懸賞募集欄には童謡の題目を「ラジオに關したもの」と定めていた。しかし1936(昭和11)年10月号より題目は再び「自由」となる。おそらく懸賞募集を始めた初期には題目を「ラジオに関するもの」と限定することによって、聴取者の拡大を図ったものと思われるが、次第に昭和ひとケタ年代後半からラジオの契約者（聴取者）数が著しく増加したことにより、題目をラジオに限定する必要がなくなったと思われる。
- 7) 日本放送協会関東支部編『コドモのテキスト JOAK』12月号、日本放送協会関東支部、1928年、15頁。
- 8) 日本放送協会コドモのテキスト編『ラジオ 子供のテキスト』1月号、日本放送出版協会、1936年、79頁。
- 9) 佐藤卓己『「キング」の時代』、岩波書店、2002年、236-243頁。
- 10) 同上、231-232頁。
- 11) 『子供のテキスト』9月号、日本放送出版協会、1930年、別紙附録8頁。
- 12) 『子供のテキスト』9月号、日本放送出版協会、1936年、85頁。
- 13) 佐藤卓己、前掲書、352頁。

本論文は、財団法人 放送文化基金 平成21年度助成・援助を受けて行った研究である。